◎［1685 - 1768］

○「」（1757年）

１．**をしてのにせしめ、の、の、ばかりものなからしめんことをす。をうなることをるべし。**　　毛竅：毛穴。　　毫髪：髪の毛。ほんのわずか。

○「　」（1748年）

２．**にをして、のにしめ、の、のにてももせざる**は、にのにして、たる、だちせざるのし。

３．もかりし、**しくのをなりとい、をい、をんで、にのをねてす**。のにもがり、 えににして、にをじ、えずをぶ。にのく、のえは、らざりき。

４．にく、をばんは、の、の、の、のにりても、をえず、をえず、ねてのとして、にんでかず。

５．し、**をてれりとせば**、げてをり、ににせん。にするのみにず、にもせん。がぞ、しれはをりをしてし、はをにしをれてし、はをしをいてし、はをちをめてし、はをてをてせば、**えれ、りにってれからんか**。らばちりみて、ずわん、「**はめてのなり**」と。（246頁）

◎『』

●［14歳で臨死体験をしたお蝶が、地獄の様子を母に語り、それを白隠禅師が記した］

６．　またをれば、もなきあり。そのっにしてのなり。これとかやえるなるよし。そのにしみたるは・・の、び・のなり。中にもとしきは、えもいわれもときどもとえさせうが、**きもてにりからめられ、のにしまにつるされて、きしませう**を、どものちりて、にして云く、

７．　「**がにて、かかるにおいめられて、のをるは、、なきなれども、りもきのどもに、なきをきえて、なきどもを、かかるにきす、くこれがならずや**」

と、ぐちにの、くもそろしし。

８．　お蝶は見捨て通るに忍びず。「是は如何なる罪障にて、かかるはけうやらん」と問い申せば、彼の小法師の菩薩の御仰せに、

９．　「がきはやな、たまたま受けがたきをけ、いきにい、あまつさえのとなる、ののすなるを、のしさは、**、はをってして、はのくがく、をてにつぎて、はのうごめくがく、のるにたり。**

　そのにしてく、

【小法師（観音様）が引用して語る邪師の説法】

10. 　『が、いてをめ、をむるなかれ。、にしれ。**なればにそのそのの**ぞかし。

11.　このにはわずや、『**、するなかれ**』と。く、

『はこれの、はくれをうなり。**の心をせよ、む**』と。

12.　のをくにけても、る、きはきぞとよ。さるに、にも、 　**りのをるこそなれ**、もはりの …

　　　　　あらや　をとみなして、をにいの

13.　これのきをくくせよ。はこれの、えてのにおいてしするなかれ。

これし、これし、これし、これし、としてをれ。このににも、

14.　ののに、うるしつけねばげもなし

　 のしともうてかせん、さわればるの　…』 と、**種々形を厳そかにし、目元を作りして、の大和の引合せて、昼夜に乱道す**。

15. ここに於いて、彼の資産になく家業にものうく、妻子を養う事得ず、頭を剃り寺に入り口をする底の**、大に家運を開いて、頭をふりてし尾を動かして歓喜す**。ことごとく言う、

16.　『我が輩何の幸ぞや、**きょうの今日初めて大徹大悟、大安楽大解脱**、にも晴にも無我無記、無念無心の外、仏の求むべき無く、道の修すべき無し』

と云って、飽くまで食い、暖かに着て、に日々としてり睡りて、心上は大地黒漫々、是を古より**の**とづけ、という。**に**し、のをすとは、のをえり。

17.　悲しむべし、ここに於て**宗門向上のをってし**、祖庭孤危の玄関鎖根に透りてす。**これことごとくののののみをし、にるして、もたかすをず、かもをてせられたるがし。**はの、**なる、にはずのにして、きをてのにつるくられて、のをる**。

18.　何が故ぞ。… ロには常に**断無の大悪法を説いて、限りも無き在家の男女をし**、尽く断見外道、無知邪見の部族とす。**その罪五逆の重罪に同じ**。この故に二三百年来抜舌泥梨と黒縄獄とは、別して罪人の多き事、叫喚・・焦熱・の獄中より遙に勝されり。

**19.　断無の**発興するに随いて、黒縄・泥梨の悪所次第に多からん。まことに悲しむべく、まことに憐むべし。

20. 汝に帰らば、比等の趣を能く憶持し記持して、汝が親眷及び他人の中にも、心有らん者どもにはさに比等の趣を常々語り聞かせ、六大地獄の所々の苦患の恐るべきある事を告げ知らしめ、… 分に随うて人を誘引し、来生ある事を恐れしめ、諸共に励み勤めて菩提を勤求せしめよ。相構えて、忘れても比十句経を怠慢する事なかれ。汝この度らく閻浮へ立帰るも、この御経の威徳ならずや。今は是迄なるぞ」

●宝暦８年（1758年）に亡くなった僧の霊が語った話。

21.　近頃三三州の間に、さる一寺あり。常に雲水二十余員を来往せしむ。**しくをてとす**。

（重病になり苦しむ。同行の僧が尋ねると、次のように語った。）

22.　「実に我此の百日以来大苦悩あり、夜とにるしやな、**ののに、をてしばりさげられて、前後左右総に動く事得ず。その苦しみ心も言葉も及ぶべからず**。然る所に誰ぞ知らず、きに二三人恐ろしきの声して責めて云く、

23.　『**ってにするは、、なき。くのをして、くにせしむるその、のにもれり**。

24.　汝が今陥墜する所は黒暗獄と黒縄と二つの大悪所を兼ねたり。全くこれ閻羅城中、五道の・都市王・泰山府君等のし玉うにもあらず。・などがにも非ず。

25.　**がより、にい、をけ、をし、をたず、をくしてしるのなり。このにするにあらず。このにつ**。

26.　**とする、・・、、このとる。にめぬなり。**

27.　その中わずかに一個半個の知識ありしも、この悪風に吹倒せられて、影も無く、形も無かりしぞや。そのわずかに星斗を白昼に尋ね求むるが如くなりしも、**土を払て絶え果てたり。…**

　常に在家信心の男女に対し、

28.　『**ももそののなるぞ、ともとも、もも、しもいきぞ。ちの、のなるがきぞ**。

29.　づねのについて、しせぬものなるぞ。**これし、これし、これし、これし、これし、をめてかせん、…**。**、、の、もかず、をもめず**、、、のとは、のがなるぞや、**ちてよも**』と。

30.　釈にあらず、儒にあらず、にもあらず、医道にもあらず、中にぶらりの、其れ斯れ是を**ちれ**という。**がにはき、のみもなきをらえて、ばりめてのにくくりさげたるがし。**

31.　… この故に、心上は常に暗昏々地、**べなる、だせざるにののにせられて、のをく。かかるのやるべき。**

32.　これがちぞや。汝一生不幸にしてのをし、らかかるにす。**らするはき、くのをえめて、ににせしむ。**そのたといのにうとも、するかるべし』

と、にの、にじにして、のきふるう。そのしさえし。

33. （その僧は亡くなり、死後も苦しむ。残った僧たちが十句経を誦すことで助かる。ある晩、その亡僧の霊魂が同伴の僧に次のように語った。）

　「…がきまできえめせし、**のれ、の、ろしや、らしや、らるのみならず、をもにひずりとす。**のは、のざみにも、いやなの**へもせいそ**、いまはまでぞ、やてるきぞ」とて、かきけちせにたりければ…。